

OLYMPUS



精密の意義に応える、今、OM-1。



価値創造



急速に変貌を遂げつつ、多様化を極めていく現代。以後ますます情報量が増大し、行動半径が拡大されることが予測されます。映像を記録し創造する手段としての精密機械……システムカメラの分野でも、この激動の'70年代に対処し得る新しい主役の出現が要請されていました。オリンパスが、今、それに応えたのです。5年有余の歳月と膨大な開発費をかけて、本格的なシステムカメラを新しく開発しました。このOMシステムは、宇宙からバクテリアまであらゆる撮影条件に即応できる、最大規模の本格的システムです。世界最初、世界唯一という特徴あるユニットが数多く揃えられています。その中核に位置するのがOM-1。豊富なOMシステムを縦横に駆使するに足る最高の性能と信頼性を具備した超小型一眼レフです。OMシステム開発の基本思想は、「価値創造」にあります。使う人にとって、OMシステムの存在が不可欠なものと認められるような「価値」の創造です。すなわちそれは、本格的システムカメラに新しく機動力を付与し、めまぐるしく変化する情報化社会に適応させることです。従来の一見レフの「大きい、重い、音・ショックが大きい」という三大欠陥打破に挑戦し、その難関を見事乗り越えて、カメラ界積年の夢を、今、オリンパスが実現したのです。最高の性能と品質を追求して、いっさいの妥協を許さず、優れた機動性と壮大なシステム展開を誇るOMシステム。それは、新しい一眼レフ時代の開幕を予告するものです。

縮小のフォルム、内に秘めた精緻なメカニズム、背景に広がる壮大なシステム。



73 グッドデザイン選定

OLYMPUS
OM-1

■F1.2付 ¥75,000 ■F1.4付 ¥59,000 ■F1.8付 ¥52,000 ■ブラックボディ ¥40,000 ケース各 ¥2,500

機動性あふれた精悍な風貌、ダイナミックな 250 駒の連続撮影、OM システムの威容。



■世界最小・最軽量のモータードライブ
■価格・発売時期については挿入の価格一覧表をご参照ください。

OM
SYSTEM



一眼レフの概念を超えた最高の機動性。

■操作性・高性能を重視した上での小型化

身のまわりの製品がすべてコンパクト化されている現在、一眼レフカメラだけが依然として、「大きく」「重く」「ふ恰好」な姿で取残されています。これだけハンディキャップを背負っているのに、年々一眼レフを買う人々が増えてくるのは、なぜでしょう。それはやはりシステムカメラとしての一眼レフに、それ自体の持つ高い性能と価値を求めているからに他なりません。

OM-1は世界最高の性能を発揮する本格的システムカメラを主眼として開発しました。しかもその上に、OM-1だけにしかない新しい価値が付け加えられています。小型軽量化の導入から生まれる優れた機動性がそれです。一般に一眼レフは、システムカメラとして高性能を発揮させるために、小型化することに非常な困難を伴ない、むしろ不可能とされていたのです。それゆえ本格的システムカメラの超小型化は、いまだ実現されていませんでした。その壁を、飛躍的な技術革新により、今OM-1が見事に乗り越えたのです。

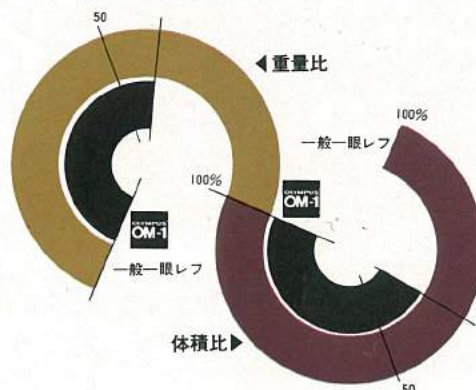
小型化が実現されるからといって、各操作部が使いにくくなったり、性能がおちたりすることは、本格的システムカメラとしていっさい許されません。OM-1ではむしろ大型にすべきところは普通以上に大きくし、高性能化を追求しております。

136×83×81mm(F1.8付) この縮小のフォルムは、優れた操作性や高性能を持たせる大きさと、抜群の機動性を持たせる大きさの双方を十分に満足させた結論です。

■携帯性にポイントをおいた軽量化——

人間が持ち歩くカメラは、軽くて携帯に便利であることが大切な条件です。一眼レフの場合、とすればこの欠点は、高級機だから仕方がないと、今までなおざりにされてきました。あの肩にくい込む重さと、ごろごろする大きさに不愉快な経験をされた方はきっと少なくないはずです。

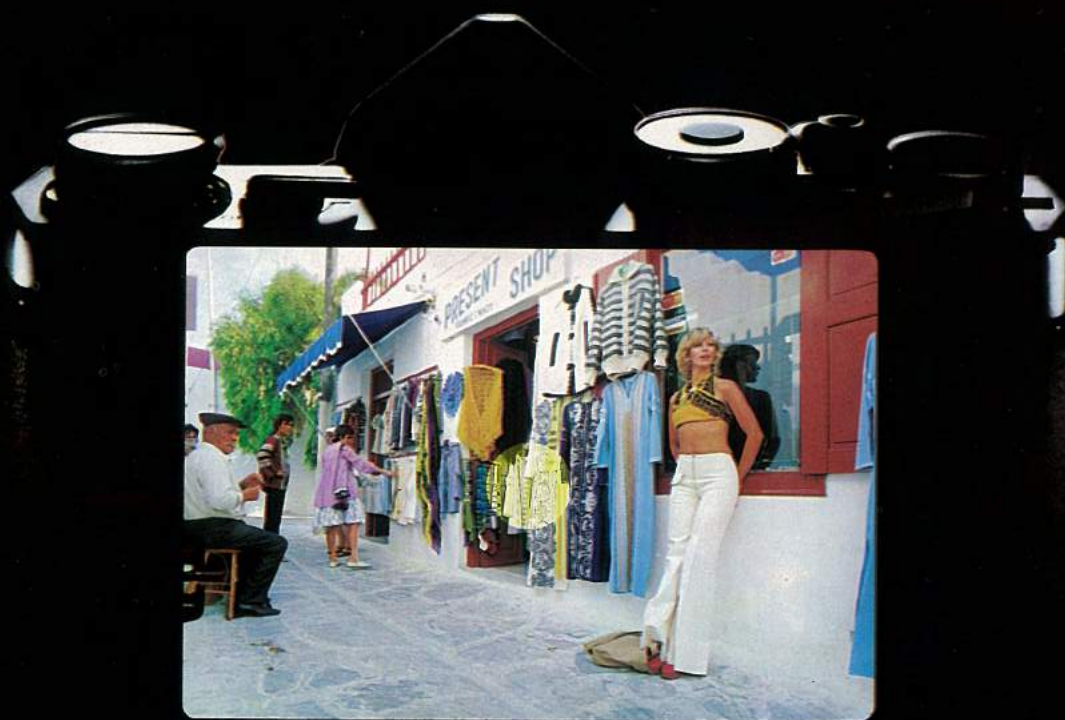
OM-1はF1.8付で660gr。一般一眼レフに比べて約40%減の世界最軽量を誇る画期的な一眼レフです。物の大きさを端的にあら



わすのは、体積です。OM-1 (F1.8付) は400cm³、これも一般一眼レフの約35%減です。OM-1全体がいかに縮小されたフォルムであるかが、はっきりとわかります。一般一眼レフでボディ1台・レンズ3本持参するところを、OM-1ならばボディ2台・レンズ5本持っていきます。その分だけ行動半径の広い撮影活動ができるわけです。またカメラの高さを83mmにおさえてあることも、他にない特徴です。持ち歩き易くするために、大型ペンタプリズムを採用してあるにもかかわらず、邪魔になる三角突起部を極力小さく低くするようにした、その携帯性への努力の成果です。

■夢の機動力を実現したメカニズムの秘密

OM-1はなぜ小さくなったのでしょうか。その謎を一言でいうならば、それは独創的なメカニズムの開発によるものです。例えばライカ以来続いてきたフォーカルプレーンシャッターのメカニズムに改革のメスを入れました。またシャッター幕を引くりボンに特殊な素材を開発したり、軽くて強い高級合成樹脂を採用してあります。TTLメーターのレイアウトも変えるなど、例を挙げれば切りがありません。部分部分をわずかつ減らした程度では、とても果たせない超小型化なのです。一眼レフカメラ設計の常識を抜本的にくつがえしています。それだけでなく、体積比で大巾な35%減とはなりません。まさに英知を結集した設計技術の極致といっても過言ではないでしょう。できあがってから批評するのはかんたんです。しかしわずか縮めるために、その費した設計努力は大変なものでした。設計・試作・検討・再設計——この繰返しの連続です。常識を超えたカメラを創造する先駆者の苦しみを十分に味わいつくしました。逆に、わざわざ大きくした所もあります。よく小型化に使われる小さなスプロケットを用いたり、手にフィットする両サイドのデルタカットを省略すれば、横巾は7~8mmたちどころに短くなる場所です。しかしあえて操作上から、これ以上縮めては扱いにくくなる限界点で止めてあります。超小型一眼レフOM-1の誕生により、本格的システムカメラ分野に機動性が加えられ、一眼レフの新しいページが開かれました。



交換可能で大型明快、広視野ファインダー。

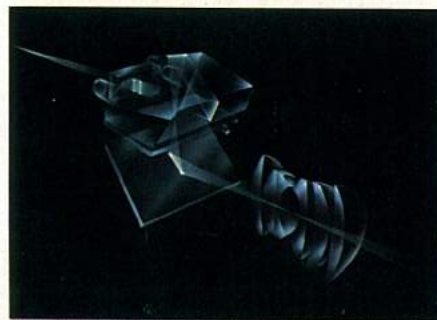
■世界一明るく大きい広視野ファインダー

本格的システムカメラとしてのOM-1は、そのシステムを縦横にこなしうるだけの高性能が、ボディの各部に具備されています。一眼レフカメラの最大の特徴であるファインダーもそのひとつです。すべての被写体が、ファインダーを通して映像化されるわけですから、暗かったり、見にくければ大きなマイナスです。ファインダー方式に特徴を持つ一眼レフでは、そのファインダーの良否が、一眼レフの生命を決定づける最も重要なファクターなのです。

OM-1では、このファインダーをギリギリの極限まで追求して、明るく大きく見易い広視野ファインダーを開発しました。

ファインダーの大きさは、ファインダー倍率や視野率などでは一概に決められません。ファインダーをのぞいたとき、何mmのレンズを使おうと、中の像がどうあろうと関係なく、ファインダーの端から端までがいかに大きく見えるかが問題なのです。OM-1の仕様に、ファインダー視野角という新しい項目を設け、短辺23°30'、長辺35°と表示してあります。要するに、迫力あるピスタビジョンなのです。ファインダーをのぞいて、その見える面積を比較してもらえばよくわかります。OM-1は、一般一眼レフより面積比で30%も大きく見えます。テレビでも、16インチよりも20インチのブラウン管の方が、画像に迫力があるのと同じことです。またファインダー視野率も、実画面に対して97%です。ファインダーで見られる視野と実際に写る範囲がほとんど一致しており、

それだけ正確なわけです。ファインダー倍率は、一眼レフの場合、ファインダーの大きさを表示するのにあまり適さない数値です。焦点距離55mmとか58mmなどによって変わってくるからで、OM-1は、50mm標準レンズ付で距離∞の場合0.92倍になります。OM-1のファインダーの明るさも、これまた驚異的なものです。EV値比で一般一眼レフに比べ70%も明るくなっております。ペンタプリズムに銀コート、ミラーに多層膜コートを使用して、光のロスを極小におさえた努力の成果です。ファインダーが見易く、ピント調節も楽で、スナップや接写、超望遠レンズの撮影などに威力を発揮します。



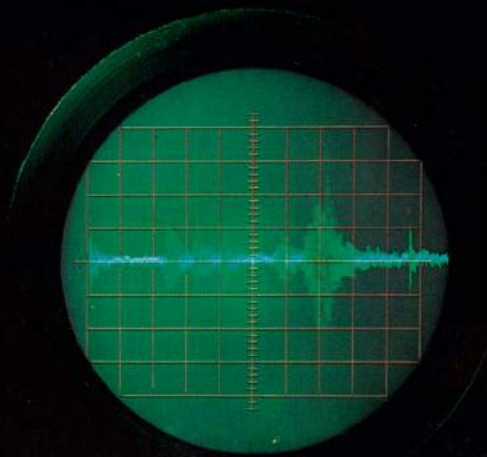
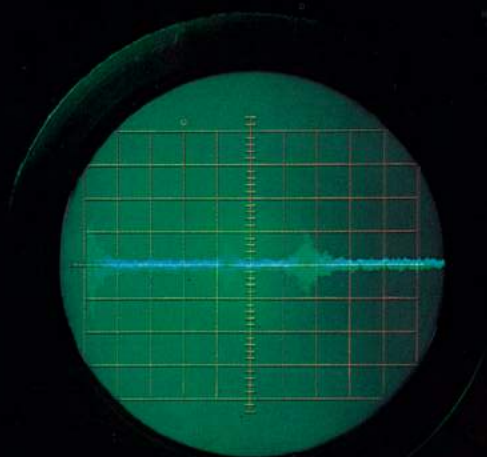
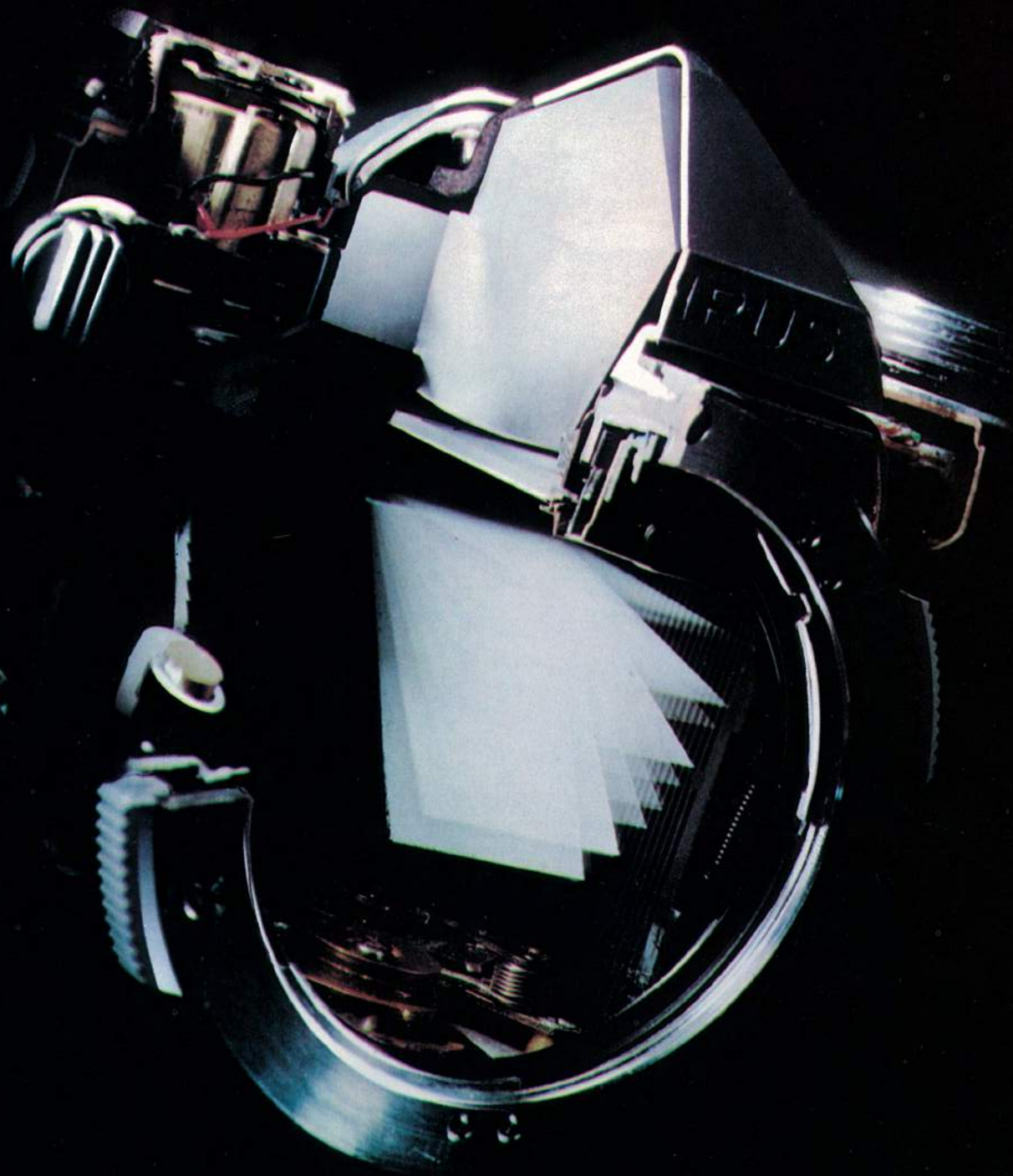
■正確な露出を約束する開放測光式TTL

OM-1の露出計は、撮影レンズを通してフィルム面に達する光の明るさを測光するTTL式です。ファインダーが常に明るい開放測光を採用。その受光部として、2個の高感度CdSが接眼部の両側に置かれ、画面の中央部を重視した明るさを測定しています。測光のしかたは、どの交換レンズを使ってもまったく同じです。ファインダー内の露出計指針を、シャッタースピードや絞りを変えながら、指標の中央にくるようにするだけで適正露出が得られます。

■ペンタプリズムの着脱を不要にした

新しいフォーカシングスクリーン交換方式

一眼レフの最も大きな魅力は、ファインダーにあります。そのファインダーを100%生かすには、フォーカシングスクリーンの交換が必要不可欠の要素です。もし交換できなければ、一眼レフとしての値打が半減してしまうばかりでなく、システムカメラとしての本来の目的をも果せません。標準フォーカシングスクリーンだけでは、超望遠レンズをつけると、マイクロプリズムが黒くかげり、使いづらくなります。拡大撮影や顕微鏡写真では、倍率が高くなって、ピントが合わせられません。またスナップ撮影では、明るくボケないスクリーンが欲しくなり、シフトレンズでは、そのシフト量を決める目盛も必要です。それぞれの撮影目的に応じて最適のフォーカシングスクリーンが使えなければ、システムカメラとして十分に使いこなすことができません。それで今までは、ペンタプリズム交換式一眼レフがシステムカメラの代名詞として使われていました。しかしその本当の意味するところは、フォーカシングスクリーンを交換することにあります。OM-1では、新しいフォーカシングスクリーン交換方式を採用し、いたずらに大型化するペンタプリズムの着脱を不要にしたのです。小型のボディでありながら12種類ものフォーカシングスクリーンを交換可能にしたOM-1は、本格的システムカメラとして、その豊富なシステムユニットを充分使いこなせるだけの高性能ファインダーにしてあります。



万能の使命を果たす革命的低音・低ショック。

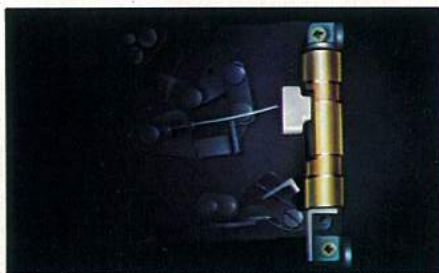
■万能性を引き出す静かな音・ショック

一眼レフとレンズシャッターカメラの相違点のひとつは、あのシャッターを切った瞬間の音とショックにも見出されます。いくら高性能の一眼レフだからといって、大きな音やショックが許されていいわけがありません。大きな音によって万能性がさまたげられたり、大きなショックによってカメラブレを起こしたりしては、本格的システムカメラの資格がないからです。低音・低ショックこそシステムカメラの必須条件です。OM-1はこの難問にも挑戦し、音とショックを、一眼レフでない、距離計式のフォーカルプレーンシャッターと、同程度まで下げることに成功しました。左ページの下の写真をごらんください。カメラの音・ショックをオシロスコープでとらえたものです。左側がOM-1で、右側が一般一眼レフ。その差は一目瞭然です。従来の一眼レフカメラでは、不可能と思われていたことを、オリンパスが初めて達成したのです。

低音・低ショックは、設計陣の血と汗の努力が実を結んだ一眼レフの新しい価値なのです。厳粛な結婚式や静かな舞台での撮影もそれだけ支障なく使えます。しかしなんといっても、手ブレを防止する効果は絶大です。このショック防止のメカニズムにより、それだけスロー秒時まで手持ち撮影が可能となります。また今まで不可能であった超望遠レンズでの手持ち撮影も、その限界を広げました。抜群の防音・防ショックを備えたOM-1は、システムカメラの万能をあますところなく発揮します。

■低音・低ショックを完成した独創のメカ

一眼レフは、約1000点の部品から構成されています。シャッターを切るたびに、各部が相互に作動を起こします。作動体がぶつかれば、当然そこに音とショックが発生します。さらにスピードを増せば、そのスピードに2乗してそれだけ音とショックが大きくなります。その音・ショックを防止する最善の方法を研究した結果、防音・防ショック用の新しいメカニズムを開発しました。シャッター機構には、ボールベアリングを4列も配置したり、軽量カーテンドラムを開発して消音効果をはかったり、ショック防止用の本格的ブレーキを採用してあります。またミラー機構にも、特殊なメカと



エアダンパーにより、ショックの少ない最も理想的な高速運動を実現化する新しい方式の開発に成功しました。35ミリ一眼レフでは、世界最初のメカニズムです。その他レンズを含めて、シャッター・ミラー機構が作動する個所には、すべてショックアブソーバーを入れました。その数はなんと20余個所におよびます。音の発生源には、ほとんどすべて対策がなされているわけです。超小型だからといって手を抜くどころか、OM-1は、まさに高級機にふさわしい革命的な超精密メカニズムの結晶なのです。

■ミラー切れがない大型ミラー

一般には、およそ300mm以上の超望遠レンズを使うと、ミラーの長さが不足してファインダーの像がケラレ、ファインダー上部が暗くなりがちです。これを防ぐには光源がケラれない、大型ミラーを組込まなければなりません。しかし大口径レンズや超広角レンズでは、レンズ後端面が後ろにさがるので、ミラーを長くするとぶつかります。ミラーの長さがある程度以上に長くすることは、一眼レフの構造上不可能なことなのです。OM-1ではその限界に挑み、30.2×36.6mmの大型ミラーを採用することに成功しました。この大型ミラーにより8mmの魚眼レンズから800mmの超望遠レンズまで、どのレンズを使用しても、ミラー切れは起こりません。特にマウントの有効口径を大きくとってあることと相まって、接写・複写・顕微鏡写真撮影におけるファインダーのケラレも起こりません。

また鮮明なネガを得るために、ピント以外にボディやレンズの内面反射ができるだけ少ないことが大切です。OM-1ではミラーボックスを大きくとり、ひだをつけて、反射防止の特殊塗装を施してあります。交換レンズの内面にも、できるだけ反射防止壁をたくさん設けてあり、内面反射の非常に少ないのがOM-1の特色です。

ミラーアップは、必要に応じて随時可能です。フィルム巻上の前・後・途中でもかまいません。振動を防ぐ必要のある、高倍率の顕微鏡写真や、モータードライブを使つての高速連続撮影時には有効です。



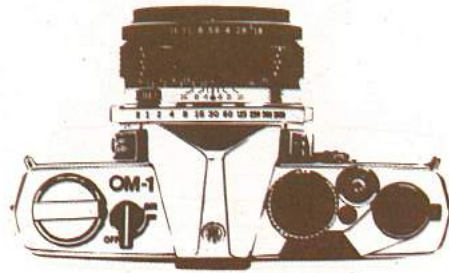
高性能に裏付けられた抜群の操作性。

■手と指の動きをよみつくした優れた操作性

OMシステムの中心的な存在であるOM-1。カメラ自体に、そのシステムをこなすだけの、優れた操作性が要求されるのは当然のことです。しかもプロカメラマンに何年何10年と使いこまれても、充分満足されるだけの性能を確保していなければなりません。OMシステム全体に一貫して流れる設計思想は、あくまでも操作性が主体であり、第一条件です。小型化は機動力を持たせるための条件として、派生的に生まれてきたにすぎません。操作性を無視して各部を小さく切りつめることは、いっさい排除してあります。小型のために、もし使いにくくなるならば即座に小型化を放棄し、大きさの必要どころは、普通以上に大型にしてまでも、その性能堅持に努めてあります。

まず巻上レバーは、指あてに金属質でない特殊合成樹脂を採用。小ささみ巻上も可能。軽くて適切な巻上角、無音ラチェットの効果も加えて、操作性が充分考慮されています。リリースボタンは大型で、周囲のリングも大きく、指のふくらみで押せるソフトタッチの意識的な設計です。スムーズな押し具合は、耳をふさいで押したなら、いつシャッターが切れたか気がつかないくらいです。フィーリングを重視し、金属部品が接触する部分は、ことごとく磨きあげて、このカメラで最も神経をくばった個所のひとつです。フィルム感度ダイヤルは、大型で見やすく、不用意に動かないロックボタン付です。露出計スイッチレバーも使い易い大型で、しっかりしたクリック付です。

シャッターダイヤルは、最も操作し易いレンズマウント部に配置しました。大きいツマミ付で左右両方に指がかけられ、真中に平行を保ったとき、丁度手持ち撮影の限界である $\frac{1}{60}$ 秒になっています。絞りやピント調節もシャッターと同じ動きで行えますので、シャッターを切るまでの一連の操作がワンタッチで決まります。



ボディは、横巾に余裕を持たせ、構え易さを強調しました。両サイドは、手のひらにフィットする斬新なデルタカットです。

巻戻しクラッチは前面に付いており、三脚やコピースタンドに取付けたとき、いちいちカメラを取りはずさなくても巻戻しができます。特に大型巻戻しクラッチのつまみやすさと回しやすさは、天下一品です。

セルフタイマーも大型。距離がはなれても遠くからよくみえるようにしました。

アクセサリシューは、普段は付けてあるとかえって撮影の邪魔になるので、必要ときだけ取付けられる着脱式にしています。レンズ交換は、着脱ボタンひとつ押して回すだけのワンタッチで、スピーディに交換が行なわれます。

フォーカシングスクリーンや裏蓋もかんたんに取りはずせます。撮影目的に合わせて必要な種類と交換するためです。

■10万回ライフテストで保証された耐久性

性能とか操作性がいくら優れていても、その内部機構に少しでも不安感をいだかせるものであってはなりません。常に安心して使え、どんな環境下におかれても、寸分の狂いなく働き続ける頑強なメカニズムが必要です。それが即信頼感へ結びつき、カメラに対する愛情まで高められるからです。OM-1の開発にあたって、この点が真先に考慮されました。種々様々な基礎研究を積み重ねた上で製品化に踏切った自信作です。カメラのシャッター駆動部には、摩耗度の少ない特殊な素材やボールベアリング、特殊な熱処理を施した金属などを使用しました。また特殊合成樹脂による軽量カーテンドラムの開発に成功。弱い力量でも安定した高速が得られ、それだけ耐久度が増しています。とりわけ交換レンズや各種ユニットの着脱が頻繁に行われるマウント部には、加工が難しく、しかも高価な18・8ニッケル・クロール鋼を採用してあります。色がうす黄色いのはそのためです。その他巻上レバー・裏蓋・巻戻しクラッチなどには厚い材質を使い、各部分とも高精度な仕上です。その結果10万回以上の苛酷なライフテストに耐え、+50℃の高温から-20℃の極低温におかれてもピクともしない強い耐久力が保たれているのです。

さらに特筆すべき点は、各駆動部がダブルセーフティになっていることです。高速駆動部分に種々の二重安全対策がなされ、万一作動がおかしくなっても次の巻上で復元する信頼性の高い設計をとっております。

各操作部が受けもつ完全な機能——すべて

上から見える人間工学的設計。



1 巻上レバーは巻上角150°の軽快なワンストローク巻上です。

小さきみに分けて巻上げることもできます。予備引出角が30°ありますので、親指がかけやすくて次の巻上も容易です。巻上レバーは、1回の巻上操作で次のような多くの仕事を受持っています。

- ①フィルムが1駒分巻上げられ、②フィルム駒数計が1駒分進み、③シャッターがセットされ、④ミラーが作動開始状態にセットされ、⑤自動絞り機構がセットされ、⑥二重巻上防止装置が働き、⑦巻上途中露出防止装置が働き、⑧二重露出防止装置が働きます。
- 2** フィルム駒数計はS(スタート)からE(エンド)までの間に、目盛がS・1・2・4・6と以下偶数で36・Eまで表示されている順算式です。撮影が終って裏蓋をあけると、目盛は自動的に元のSの位置に戻ります。
- 3** リリーズボタンは、自然と人差指がかかる位置にあり、その手応えは極めて軽快で、フィーリングも抜群です。周囲のリングと一緒に押すつもりで、指の腹で静かに押します。



4 フィルム感度ダイヤルでのASAのセットは、**5** フィルム感度ダイヤルロックボタンを押しながら行ないます。目盛はASA25から1600まであり、使用するフィルムのASAを間違わずにセットすることがTTL露出計を正しく働かせる基本的条件です。



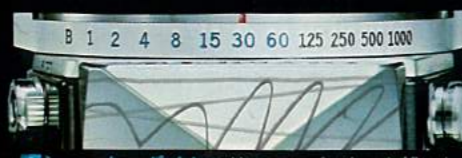
6 露出計スイッチレバーはON・OFFの切換式です。撮影するときは、ONに合わせます。電流が流れてファインダー内の露出計指針が働き、測光できます。撮影しないときは、OFFに戻しておけば、水銀電池の消耗が防げます。



7 絞り環には、F1.2標準レンズの場合、1.2から16まで8段階の絞り値が刻まれています。中間目盛が使えますので、細かい露出調節は中間絞りで合えます。またOMシステムズイコー交換レンズはすべて自動絞りです。つねに明るい開放状態でファインダーがのぞけ、シャッターが切れる瞬間だけあらかじめセットした絞りまで絞られます。



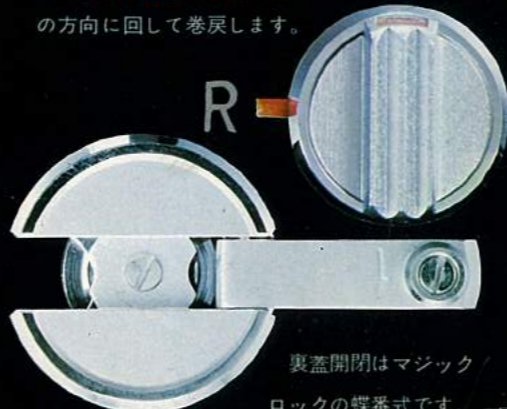
8 距離環には、すべり止めのゴムローレットが付いており、ピント合わせが迅速に行えます。またいずれの標準レンズも、最近接距離は45cmです。



9 シャッターダイヤルは、レンズマウント部にあります。B.1から1000まで12段階のシャッター速度が倍数系列で刻まれています。必ずクリックストップした位置で使います。そのセットは、フィルムの巻上前後どちらでもかまいません。

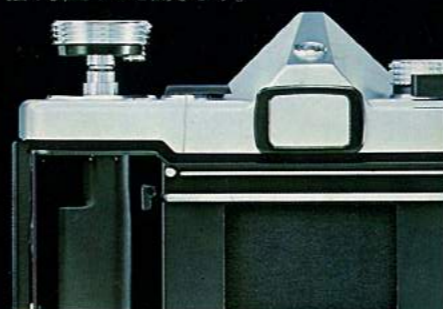
10 ファインダー接眼枠の両側にみぞがあり、バリマグニファイナダーやアイカップとディオプトリックコレクションレンズなどが取付けられます。

フィルム巻戻しは、まず**11** 巻戻しクラッチを左の赤指標側に約90°倒してセットします。次に大型の**12** フィルム巻戻しクラッチを起こして、矢印の方向に回して巻戻します。

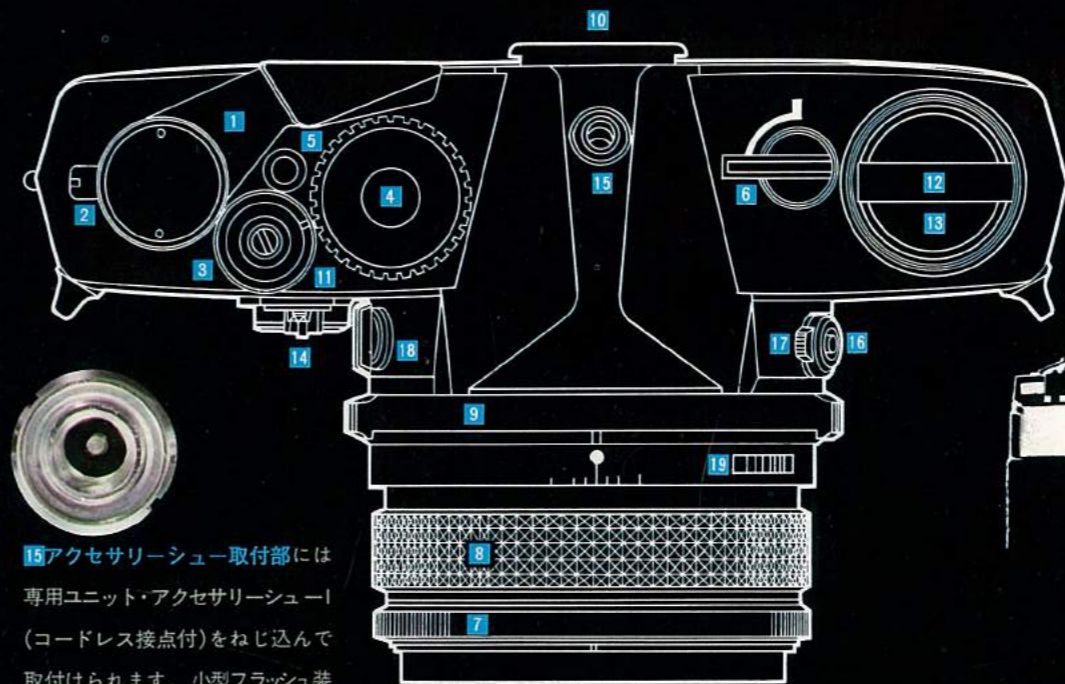


裏蓋開閉はマジックロックの蝶番式です。

13 裏蓋開閉兼巻戻しノブを一旦引上げ、さらに強く引上げると開きます。



14 セルフタイマーレバーは、左へ止まるまで180°回転させるとセットできます。下側にかくれていたスタートレバーを右に回すと作動を開始し、約12秒後にシャッターが切れます。4秒以上の時間調節や、途中での停止および再セットが自由にできます。



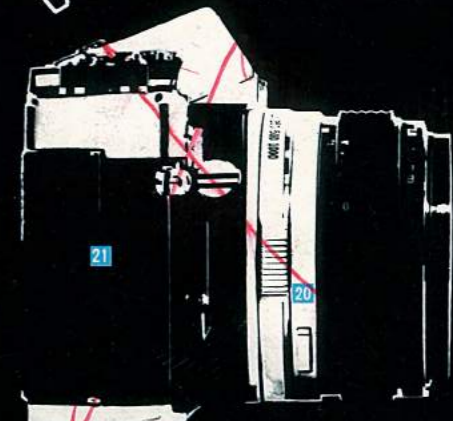
15 アクセサリーシュー取付部には専用ユニット・アクセサリーシューI(コードレス接点付)をねじ込んで取付けられます。小型フラッシュ装置・オリンパスPSI00GやフラッシュCLが、差込んで装置できます。

16 シンクソケットには**17** FP・X接点切換レバーが付いています。FP級バルブを使うときは、赤指標をFP側に回し、スピードライト(ストロボ)やM級およびMF級バルブを使うときは、X側に回します。FP級バルブは1/1000秒まで全速同調し、スピードライトは1/60秒まで同調します。

18 ミラーアップダイヤルは、左へ90°回すと、ミラーがアップした状態に固定できます。そのセットはフィルム巻上の前・後および

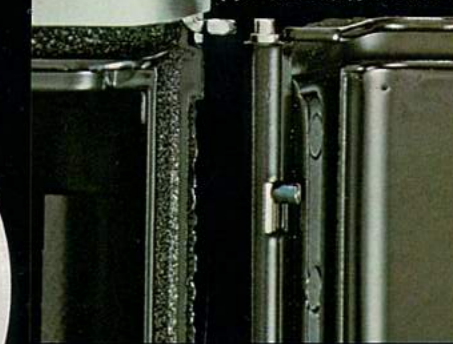
途中のいずれでもかまいません。接写・複写・拡大撮影および顕微鏡写真撮影などで振動を極力さけたいときや、モータードライブでの高速連続撮影するときに利用します。

レンズ交換はワンタッチ式のバヨネット式で、**19** レンズ着脱ボタンを押して、左へ70°回わして取りはずします。取付けマウント部は、大口径や超望遠レンズおよび各種のマクロフォトやフォトマイクロユニットを取付けても、充分カバーできるように、大型マウント口径を採用してあります。



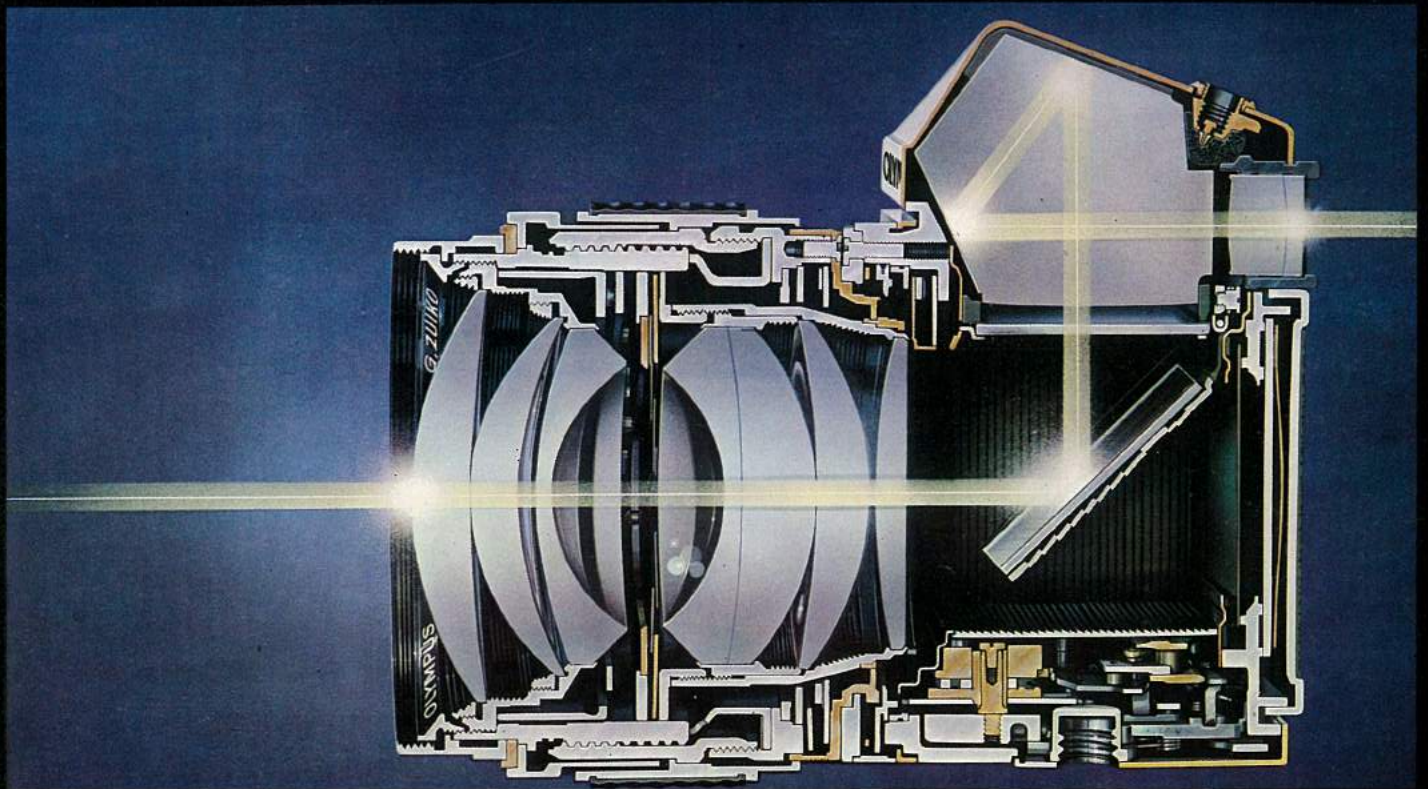
20 プレビューボタンは、レンズの右ななめ下側にあります。ピントを合わせながら、このボタンを押すと、セットした絞りまで絞られ、ファインダー内で絞り効果(被写界深度)が確認できます。

21 裏蓋は交換式で、蝶番のピンを下に押下けると取りはずせます。レコーデータバックや250フィルムバックなどが取付けられます。



22 水銀電池室は、裏蓋の右側にあります。水銀電池H-D型1.3Vを1個収納します。水銀電池の寿命は、一般に約1年位です。





オリンパスOM-1のおもな仕様

方式	オリンパスOMシステム	フィルム巻上	レバー式、小さきみ巻上可能、巻上角150°、予備引出角30°、セルフッキング、二重巻上防止・二重露出防止付
ユニット形式	35ミリフォーカルプレーンシャッター式一眼レフレックスカメラ	フィルム駒数計	順算式、自動復元
画面サイズ	24×36mm	フィルム巻戻し	クランク式、巻戻しクラッチセット式、自動復元
レンズ	<p>オリンパスOMマウント、バヨネット交換式(回転角70°)、フランジバック46mm</p> <p>■標準レンズはF1.8、F1.4、F1.2の3種(いずれも最近接撮影距離45cm)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・F. ズイコーオートS F1.8 f=50mm、5群6枚 ・G. ズイコーオートS F1.4 f=50mm、6群7枚 ・G. ズイコーオートS F1.2 f=55mm、6群7枚 	露出計	TTL(CdS2個使用)、開放測光式中央重点測定 ファインダー内定点合わせ式、 露出計ON・OFFスイッチ付、 OFFおよび低輝度自動警告スイッチ付
シャッター	フォーカルプレーンシャッター、マウントダイヤル式、B、1~1/1000秒	測光範囲	F1.4付でASA100のときEV2~17
シンクロ	FP・X接点切換付	電源	水銀電池(JIS・H-D型)1.3V 1個使用
ファインダー	ペンタプリズム式広視野ファインダー、フォーカシングスクリーン交換可能、露出計測光表示付	フィルム感度ダイヤル	ASA25~1600、ロックボタン付
フォーカシングスクリーン	<p>交換式</p> <p>■標準タイプはフォーカシングスクリーン1-1型(マクロマット式)を装着、他に多種類交換可能</p>	セルフタイマー	レバー式(回転角180°)約12秒、4秒以上時間調節可能、スタートレバー回転により始動、始動後スタートレバー逆回転により停止および再セット可能
ファインダー視野率	実画面に対して97%	裏蓋	<p>交換式</p> <p>■標準裏蓋は蝶番式・マジックロック・他にレコーデータバックおよび250フィルムバック1など取付可能</p>
ファインダー倍率	50mm標準レンズ付で距離∞のとき0.92倍	アクセサリシュー	専用ユニット着脱式、コードレス接点付
ファインダー視野角	短辺23°30'、長辺35°	フィルター径	標準F1.8・F1.4は49mmねじ込み式、標準F1.2は55mmねじ込み式
ミラー	大型クイックリターンミラー、ミラーアップ可能	大きさ・重量	(F1.8付) 136×83×81mm、660gr. (F1.4付) 136×83×86mm、720gr. (F1.2付) 136×83×97mm、800gr. (ボディのみ) 136×83×50mm、490gr.
フィルム装填	イージー・ローディング		